



グランドセントラル駅：人身事故で電車が延滞することは減多にない

日本の自殺について

アメリカで生活していると、日本にいたときよりも「死」との距離があるように感じます。そういえば、日常の雑談中に死について話す人がほとんどいないかもしれません。引っ越しを手伝っていて「私が死んだらこれ全部あなたにあげるわ」とか、綺麗な雨の音に感動して「雨の日に死にたい」とか、日本では気軽に会話に上がることをアメリカで話すと、「縁起でもない、そういう話はやめてくれ」みたいに拒否されることがあります。とはいえ舞台芸術を生業としていると、物語の中で人の死が頻繁に描かれるので、私はどちらかといういつも死について考えているように感じます。こんなに楽しい時間も気の合う仲間も、いつか私から（もしくは私が）離れていってしまう寂しさが頭の隅に常にあり、なんだかパーっと騒げない自分が少し嫌になるときもあります。

「日本の自殺について知りたい」と訊いてきたのは、昨年一緒に仕事したアメリカ人演出家でした。彼女は日本が大好きで、1950年代から60年代に制作されたモノクロ日本映画の大ファンです。中でも心中物映画の絵が美しいと、あれこれ調べて見せてくれました。心中直前の男女が布団の上で乱れている俯瞰の絵がお気に入りだそうです。ただし、作品中に巧妙に自殺を利用して観客を高揚させるクリシェは日本映画だけの特徴ではなく、みなさんご存知のシェイクスピアのロミオとジュリエットも、『白鳥の湖』の王子とオデットも自ら命を絶ちます。また歴史上クレオパトラ7世もマルクス・アントニウスも最期は自害であったという説がありますし、統計上でもロシアやフィンランドの自殺死亡率は日本のものより高いです。したがって、自殺が日本特有のものではないのは明らかですが、日本の特に若者の自殺死亡率が先進国の中でも高い水準であることが彼女にとって気がかりなのだそうです。

確かに、日本の芸術は世界中で多くの人の魂を揺さぶり、彼女の日本文化への関心は大変喜ばしいことですが、エンターテインメントの中の自殺と実際に日本の

中で今遂行されている自殺が同じものだという気がしません。現代日本人はなぜ自殺をするのか。人を自殺に追いやる三大要素が、自殺潜在能力、所属感の減弱、負担感の知覚、であることは松本俊彦氏の著書『もしも「死にたい」と言われたら』から学びました。この理論はアメリカの心理学者トーマス・ジョイナー氏らの『自殺の対人関係理論』からの引用で日本人のみに当てはまる理論ではありませんが、日本人が他の民族より日頃からこの三大要素が重なるポイントの近くにいるのかもしれない。武士の切腹の風習は日本人の身体的疼痛への抵抗感を平均的に減少させ、冠婚葬祭以外の宗教的な活動が日常的でない人が多いことから所属する団体が家族や町や会社に限定され、島国という地理的要因から個よりも団体の平穩を優先しやすく世間体を気にしながら生きることが強いられること、などが理由として挙げられます。

それでは、何が人から自殺願望を消し去るのか、それは他者とのつながりだそうです。末井昭氏は著書『自殺』の中に、「人は人とつながることによって、自分の中に力や勇気や充実感が湧いてきて、心がウキウキしてくる」と書いています。それは、いい舞台を観劇したり、制作の一員として参加したときと同じかなあ、と思いました。ニューヨークで日本語訛りの英語を話す日本人の私でも所属感を得られているのは、舞台と照明とそれを介して知り合った友人らのおかげです。承認欲求や自己肯定が満たされるだけでなく、たとえ自分と同じ意見でなくても、相手の考えを受け入れそれに親身に応えることが苦楽をともにすることにつながり、過剰自己観察が薄れ孤独から解放されるのかもしれない。どんな舞台作品にも「つながり」を生み出す可能性がありその制作に精進したいと想いを新たにすると同時に、自殺を他人事のお祭り騒ぎとして描くことだけは避けるようにしたいなと感じました。さあ、これを英語でどうやって演出家の彼女に説明するか、ああ難しい。